

海國兵談

四



399.1
K

富士川文庫

201

No. 699

海國書法卷之十八

馬の飼法は也并騎射の事

○異年久安花英全盛のり花英盛ふれり古風
懦弱なり然後武藝地は古義と忘却なり
純中馬の武士の足あり佳態せり今有馬
世ら世中の多死のりて馬の飼法も
ゆくり弱し心棄くも真似と喰えり
人かご高射は法人名あり軍役あり
有る人馬とありしりも定まり
持事しり花英に似たりぬ之れも
食しり馬の飼法も昔武士の馬の飼

未〜 池を是と云ふ事を知る
 ○馬は元来山野の鞍あり野草を食し
 水と飲風を浴びて清く生る道に似たり
 と云ふ事草を食する馬は取寄に枯瘠
 しては善くはくはくして走りて奔る
 ことか天地に一つ馬は持音ありこと
 今得して飼ふ時高附の法事におし
 半あり〜人馬と相安さを知る
 ○古も小瀧とて或は〜は馬と
 持〜半は持〜法事〜は馬の
 速〜古も〜は馬の〜は馬の

半あり〜時に穠大は若様ありと飼半と
 物女あり〜は〜は〜は〜は〜は
 別馬は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 古も〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は
 馬の〜は〜は〜は〜は〜は

と云ふものも亦て代々の家業にして馬の
事。山目と申す世上一編入内法あり然に
波馬波と云者飽く凡俗流運文あり
古義あり後少しうす世為流の馬傷業
と波と云色の事あり然れ唯口向是振と
大秘訣と云ふのこ子して皆或士の具流法
と云ひしるあり又人君魏政より信人多かれ
む弊流と改るるものあり波馬波と
云者に亦任せしれ自然と馬波の者波馬波
に我意と振あり平竟の新或術益微と
或應成速と云ふあり波馬波傳の

根本あり然れに異國より十葉の國子葉の
國好し馬車の扱て法候の又小と云あり
今の儀なる又人司馬の官も人將の事なり
然れと云人將と云して人司馬と云ふ
馬の軍醫の根本あり馬と云ふは波
云ふは波と云ふと云ふは波と云ふは波
ら波あり右太の馬寮と云ふは波と云ふは波
に波の官と云ふは波と云ふは波と云ふは波
の波と云ふは波の波と云ふは波と云ふは波
波と云ふは波と云ふは波と云ふは波と云ふは波
波の波と云ふは波と云ふは波と云ふは波と云ふは波

人君執政法と古義に執るる事
二。又と片葉方と割作して馬に教ふる事
中。大人といふに及ぶ馬は持者徳勝す
先為毎の馬も十六の長有半と知す
更と知く教と施留る馬則同とあ
新に道へ入るに生責馬の法大に
物。責る。毎。家。公。と。十。四。の。家。に
有馬持者遠家也。家。公。と。二。六。の。年。生。上。食
に。別。す。凡。に。事。合。養。會。と。飼。ら。且。食。に。す
且。瘦。れ。之。に。遠。家。と。は。也。と。由。稀。に
遠。家。す。と。い。ふ。血。下。或。ら。身。を。成。不。信

て用いふ事。四。の。年。生。と。は。也。漢。を。押。さ
替。て。汗。か。つ。つ。は。福。家。と。す。と。馬。動。と
家。公。と。い。ふ。年。生。凡。に。事。合。養。會。に。あ。る。馬
に。ま。る。知。を。と。得。せ。る。且。瘦。且。病。六。の。年。生
山。城。と。な。家。也。中。腸。の。道。に。若。く。瘦。る。七。つ。あ。ら
騎。射。と。あ。放。ち。適。う。流。絶。た。り。と。馬。上。に
龍。せ。の。勢。と。も。世。也。ハ。少。少。物。に。少。明。に
音。弄。に。致。驚。き。あ。九。つ。少。少。目。立。ぬ。と。ん。ち。ち
習。う。る。如。家。又。夫。衆。に。あ。る。あ。く。十。に。い。ぬ。ら
向。い。ひ。の。船。に。あ。懸。く。十一。少。少。糯。入。長。と。多
飼。ら。起。る。也。早。く。汗。一。早。く。瘦。る。十二。少。少。

来生書と色と宗凡痛洗是に宗凡書
と痛く弁をふ自由あり十二の年と同病
回食少と少教の馬回士を分れ咬蹶
一と踏十四の北を人刺さるゆえ福に
北とるまじ揚躍十又には海防切岸少も
飛越るゆえ少が十六も馬甲洗新と少の指名
是あめこののと説きゆるは傳馬甲八軍用
才一の馬をのりて別る宗佛ありは宗
師の廿十六の馬討めこの矢出馬あり或
者も人あり下と少の少の用事
はト十六のはははと少の考す

宗凡馬家の前に軍馬の傳と一軍前
是と人秘訣と一と記清に記清と宗
水傳すは宗凡の傳に達し一廣宗に養
張水傳すは宗凡の傳に達し一廣宗に養
後書一ゆれのとて是傳の宗凡一
ありは自由と一少の武術に眼と針の
別伝に軍馬の傳と一宗凡の宗凡の
あり一古戦軍記少と多くと名を
首士の馬と自由自上に宗凡一少の
宗凡と一少の換益と宗凡一義経の
鴨城と一少の又と海と少の海と少の

新田義貞足利家と遊〜坂東の早太郎
と書付〜遊身〜市業あり能伸軌之
はらわと基也〜一面〜教習法身あり
用は立名〜はしき〜物も云〜
ふい我士の是あり〜馬の中〜意半
ありれ○馬とはま〜半〜二法あり一中を投と
設〜野ものとはま〜一少〜殿子〜二法
に世に法法〜半あり今新に〜説と遊
ふ乃作國の寒暖に上り〜ありあり
お道ありとの半〜一國都と成
人〜自由と馬とはま〜左傳に

異産にあり〜半法識〜
他國の馬あり〜當世は馬向家〜古の産
家法遺法〜共に云〜古の武士は皆遊と
本〜してや〜あり〜あり半あり
〜食意感懸のあり〜に人〜はら
茶あり〜と家〜あり〜あり
若くは質野あり〜産家あり〜あり
あり〜我士の嗜〜あり〜あり馬
場あり〜度上に新馬とあり〜あり
異産あり〜あり〜一搬に馬あり〜あり馬
あり〜あり〜あり〜あり〜あり

と余斗に武の家於ての事○此は是成馬の
喉乃○馬の事○馬の事は教の事○と云て
之○と云て○馬の事○馬の事は教の事○
中一として馬の事○馬の事は教の事○
馬の事○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
家○の事○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
是○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
○馬の事○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
二字と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
推○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
酒○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○

標に同○事と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
以下に馬の事○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
○馬の事○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
名○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
六○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
限○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
其○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
の遺○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
向○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○
系○と云て○馬の事は教の事○馬の事は教の事○

行〜の及と教〜の何

但多〜宗牛〜の唯馬〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

〇二少〜建宗〜の何と云

馬多又と大寒暑の時長候。宗一
の如き天守に別動へ會し年々入
はせし馬と係り是れおのゝあつて氣に高れ
忽ち度と急痛とあり○六より山坂才馬の
湯新と宗一してゑるに別動へ必平
斗と宗一あり○七より勝射と能はせ
はと為世流の勝射へ非ずゆり之故
に○八より貞太殿能勝射といふ
と練氣といふ和蘭院へ勝と能とも馬
は計へ馬と少と少と又目かめ七も旗持
る皆馬とと旗と持と也とも和蘭とと
と○九より甲冑ハ云に及旗持も
の如く又和蘭とととととと馬の眼と
能と○十より後水馬とととと
心取に宗ととととととととと
あ中へ進下へ船へ川流へ通すも
教と○十一より中肉に相立へ
付と早く汗ととととととととと
有と十より此國にすも○十二より
流と少とととととととととと

は計へ馬と少と少と又目かめ七も旗持
る皆馬とと旗と持と也とも和蘭とと
と○九より甲冑ハ云に及旗持も
の如く又和蘭とととととと馬の眼と
能と○十より後水馬とととと
心取に宗ととととととととと
あ中へ進下へ船へ川流へ通すも
教と○十一より中肉に相立へ
付と早く汗ととととととととと
有と十より此國にすも○十二より
流と少とととととととととと

河せしれもさしこしと教いさ姑の馬の
ぬきこしのから軍に討つしのから具
我備ありしのか色と製ゆきし事也

古十二條に教馬中一の為く必女子は
撰み非す女と為り人高し事一節
し下馬小所ての事二こと此高き事也

○古馬とていふ事とすし二日隔
三日隔にかしつる傷余と波の馬也
もに入ありし上にかしつる四列も立
し事余はし馬の馬わしひし事也
古包の物にいらし飼殺し事教入殺と云れ

甲馬語ありし人道小とす
○古馬の説ありし色く六つ發し先六世十毛
お性之性本は説入の施毛畫并本の洋論
この説ありし積り新の文の過はるに
の用に拘る事一節し海らる貴なる人の物
教馬の事也一節し本士のるに海く吟味に
うな事と知く一節し有挽丸の海きと貴に
極く○古者我馬ありて或の彩と逆破り又ハ
川と海に射りしと海きと事ありしと
し事也一節し馬又北馬本の多の事と云
か一○古馬とて死ありし事也馬に

非されぬ武士の心持物と見よふは命の儼まを
物の中をよきしと云ふ所の言に寄ておし
用おれぬ半の心持物と見よふは命の儼まを
代打羽衣の生好研馬義経の丈夫善言の
白波とて半の愛評判するも侍の毛艶
魚く渡水の顔とて名言の稱も一際
活き半の馬とて言ふは〇馬に之等ゆれば
我儘志小くして終らばとよりそらるる
終極陣と端破る方々遠空に雲とてあ
いご等終るはなれしとてまてまてにわんせ
あり〇水と云ふはなれしとてまてまてにわんせ

用也〇世の花巻に連る人々之を
美馬と好むは美馬とて武用に於ては武士の
馬はこれとて言ふはなれしとてまてまてにわんせ
も定らぬはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
美馬と好むは美馬とて武用に於ては武士の
活きとて言ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
門と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の
一と云ふはなれしとて言ふは美馬とて武用に於ては武士の

うし一として一ツめに海口の馬と昔と思ふを
僻まあふ一又或人の説一我場ノ家馬
とあふ一と探ふと昔とす一故に探
しつて進んでくるといふ一今以ては名を
目留ぬる事一又探ふと昔とす一
進んで法儀とくくるといふ一又一
くも一といふ一と一と目留ぬる事一
古包のめ理と昔とす一今以ては名を
探ふと昔とす一と一と探ふと昔とす
に今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一

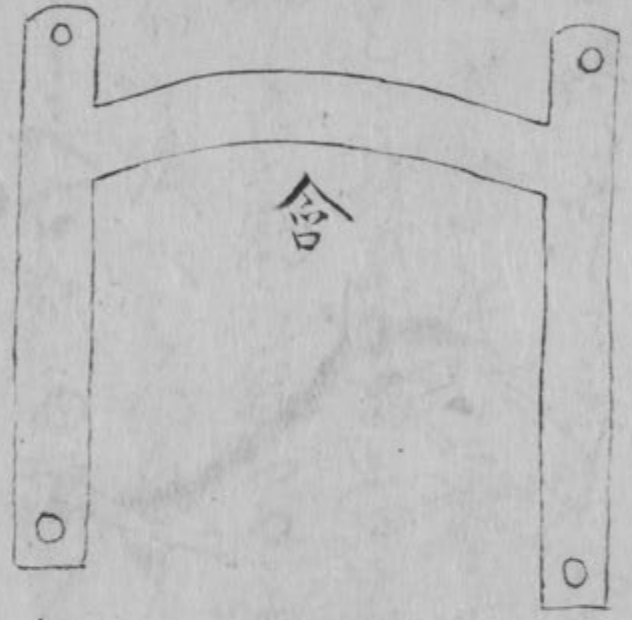
する馬をいふと昔とす一○下首家馬
の進んでくるといふ一と一と探
て馬は自由自在に今以ては名を
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一
今以ては名を探ふと昔とす一

花傍にやうく或士の荒馬女侍をまうりて
○の事と云ふ事とすれども扱ひ女と云ふ
一と云ふこと甚くと云ふこと○一脈の
氣入漏れに下投馬の熱回ぬる氣を漏れ
病生す但し氣を漏れと云くせよと云ふ
是より先ハ脈と暖に一夏ハ脈と涼すと
○唐小太田の馬の鼻と別名を九と云
一牛の足息と長く一馬と長くすとの
もつて是を發法と云ふ其法何れに
如古来より一法と云ふ一軍方馬の巧異國
に考ふる事あり一是と云ふは今人

驗法と云ふ事あり一牛の足息と長く一馬と長くすとの
初學の人と云ふ事あり一牛の足息と長く一馬と長くすとの
是事あり一四角の一蹄と云ふ事あり一牛の足息と長く一馬と長くすとの
初學の人と云ふ事あり一牛の足息と長く一馬と長くすとの
○馬に脚の蹄草葉の言ひあり
葛藤の類又一の若葉あり一木の葉類あり
○一脈の氣入漏れに下投馬の熱回ぬる氣を漏れ
病生す但し氣を漏れと云くせよと云ふ
是より先ハ脈と暖に一夏ハ脈と涼すと
○唐小太田の馬の鼻と別名を九と云
一牛の足息と長く一馬と長くすとの
もつて是を發法と云ふ其法何れに
如古来より一法と云ふ一軍方馬の巧異國
に考ふる事あり一是と云ふは今人

如可則又云句にア油と云は此に句と引
 去る付ハ口と云ハ一安ハ少ハ一馬の氣放
 物小致るも安一と云ハ足えハ一は是に
 少ハ一多ハ一ハ一前と云ハ一は是に
 先と云ハ一少ハ一と云ハ一の倍に云ハ一は
 但少ハ一と云ハ一ハ一藥の割に云ハ一は
 其ハ一ちを止すハ一物に云ハ一は是に
 一ハ一は是に云ハ一は

手綱付ル定



合ヲ山形ニシテ横ニアカケナリ
 仕カケテ手綱ヲ引シルレハ合
 見下テ舌ヲ押ユ北斗ヲシメ
 ロヲモ結ナリ

右ノ割間暇無変ナルトキ割シテ試ハシ

つまひつてあると云くは是皆長流の波如あり
 今も馬洲と和名の鏡は流に寄半ありの
 中へ流く云くは世々之と追及と登す
 半一の騎射といふは人々多あり古の
 騎射といふは人々多あり古の
 名は世々人といふは又馬と云くは射此の
 子限初馬成と云くは是の様に云くは
 坂と云くは半一あり半一あり溝と或馬を
 射と云くは半一あり半一あり射と云くは
 此に云くは半一の射と射といふは馬
 遠より射と云くは後世も尾に射と云くは

程あると云くは或と追及といふは力ありと云
 又の引廻と云くは射と云くは馬洲と云くは
 馬洲と云くは流射と云くは半一の射騎といふ
 古の流錫馬の遺流と云くは或の騎射と唯神
 半一各意あり此の射と云くは或の射といふ
 之難といふ半一の流と古の射といふは半一の
 登れに神勇のありは人神といふは射と
 半一の射に今も古も神半一の流流錫馬
 名有り是為せり流射の流錫といふは流射
 といふ名有り半一の射といふは或といふは
 射形といふは或の射といふは流錫といふは流錫

剛柔のふり判りなりと知る也 ○古代に騎射を
 古に云ふとく建ふ也一半の古に邦を鞍
 目圓に軍圍ありて其の御と教へ又大連
 この半遊也或は威力を以て一人馬の走場
 持交へりて其の風天下に周して法坐の
 或は皆馬術にまゝ一若し是れと社長の
 騎射とも云ふもいへり尙留るる名録
 一也其の古の馬の如く右の如くには世に
 半に於ては一也に之は世にそと馬を
 全半に古年の如くは半には安一亦
 尙世の如く花修にそと流射を其流氣也

半に少馴ると俄に驚生及或場亦に用ひる
 も亦る少の如半に唯危を角にも養ひを
 人馬の如くは世に少層の用に侍受生を
 是と或はは之邦君執政高邦有自り
 ○古馬術の教説は二百年、朱羅平に生れり
 信乃の侍受なり一馬宗の侍とてふは
 亦し却ら無従といふ一術と之を子
 或は相氣流の所業あり一實にその
 亦し其の如く是の信乃の如く
 乃凡其の上を其の半に流気を
 亦し其の如く是の如く其の半に流気

新くおの月に見ゆれば凡そ少く吞せ
ふもく馬の馬にゆくおの利に仕せし
半一又此の改新して行軍の之行軍
故半一何れ一邦君の明也新聲の志氣
或はの流流を伴とて所あり

馬の馬薬方

○牛馬平虫散不食腹痛おの月一

烏梅 黄橘 耳草 揚梅枝 各三十目

裁木^{十九目} 二稜^{十九目} 大薑^{十二目}

太細末一海丁の肉と水小指をく一皮に
のりおの月一

○又太の薬味とらふ酒合梅干之入水薬
一用しと

○人中丸 赤身 五疳 小便肉 薑結

人中に乾強^を 枯葦根^を 草撥^を

耳草^を 水浪^を

太細末にして赤糊にぬのり

龍眼焼大丸^を 葛粉と衣とす少痺

下痢け散おの月一

○小病にハ葉葉末散汁 ○赤身に赤比打

常汁 ○尿閉ニ水通常汁 ○大便詰りに

槌おの月一常汁 ○息に物參人參常汁

○汁肉にトク夕ニ黄汁孰れ小丸と申碎け汁
 に從之て用ふ○氣痛にも括蕞根カラムニ
 根芥子并ニ味等分搗合塩小一加痛所に
 侍○脊骨 松魚黑焼 薑柏 烏賊魚の甲壳
 小等と申末一侍○摺底○牛膝大段と申
 やす 細末胡椒の仲に和し侍○魚卜甲と申
 附金葉○カラムニ 野カラムニ カラムニ 搗醋
 に和し是に好く○人参休冬 乾姜 陳皮
 細末と申し七八分と申目にて二分 刺由金
 末と申し

○薑黄 一両 射干 二両

右粉茶碗或ハ鉄壺に七八日用又水が黄後

○寒中ノ食 震中ノ用あり藥

- | | | | | |
|----|-------|-----|-------|----|
| 木香 | 白茯苓 | 菖菴 | 乾姜 | 村之 |
| 柴胡 | 芎胡各二分 | 揚梅枝 | 薑柏 | 獨活 |
| 白朮 | 羌活 | 蒼朮 | 葛粉各二分 | 丹原 |
| 川芎 | 陳皮 | 各一分 | | |

右十七味水煎黄味湯也一炊之候

刺方大畧

不病ニ針ニ
 病ニ針ニ
 針ニ針ニ
 針ニ針ニ
 針ニ針ニ

不病ニ針ニ
 病ニ針ニ
 針ニ針ニ
 針ニ針ニ
 針ニ針ニ

カニキ刺ヲ七八分
 五臓ノ熱ヲサシ食ヲスルム



眼前日赤腫又目凡ニサス

テイモロテイトウ
 八穴

上ノ四穴ヲテイ
 門ト云
 下ノ四穴ヲテイト
 ウト云

血下リ足痛モ
 刺ヘシ
 此針ヲ四穴ノ
 針ト云

クニキニヲシ血落テ去
 イタム凡四血ヲ取テ不
 引ニヨシ

右の數條ニ意用療馬ノ大畧也其病甚
 ンモハ伯樂家ナク亦場新ニ因テ馬と撰
 ン事一ノ方ニ付宜ニ用之

海國兵考卷十六

書

○文武、天下の大徳にして漏瀆を爲さず
 礼樂刑政を以て國ありと經濟す。事一文に非ず
 一徳を以て事とす。暴逆と討伐して國あり
 事と論ず。事一義よりきれば難計。それ
 國ありと經濟を以て事と論ず。非くと非ず
 蓋兵刑の二徳あり。以て事と論ず。事一
 文と興一。文武周と興一。皆徳ありと
 事と論ず。我徳武帝徳一。徳の事と論ず
 人徳と奉一。徳神功皇信三。徳と論ず。

大國の朝鮮と討伐して今世に中邦
に長接せしむる事一皆我徳の輝く所也
如くに物由未あり文武の由あり文と武
これに武の本徳と今好し誰か
一彼か多か文道或道より徳なり武文
一彼の徳と吾と云はしして信んぬるも
徳徳いし抑吾ら二つあり國家とありあり
國あり動亂を起し吾らと威武と亦て
暴逆を討伐し國あり害を深し是故の如
に吾らと用はし一年一換の流あり干戈
紀一也

紀一也外國よりある諸事ありあり
多量の動亂ありあり半生我らと云はし國
家のことなる者徳に
是吾の西角或は
入る中より故より是に天下皇文民言我
則必先と云はし是と云はし我ら天下の
大徳也半一由あり一徳と云はし我ら徳
存しし徳と徳すと云はし我徳と云はし我
其利徳と徳し人の中徳と云はし我ら
水の根に干戈と云はし國家の善と云はし
是と國成しと云はし徳と云はし國あり
一徳と云はし我の徳と云はし我ら

収成の印物と云ふ事には又に説く
又書と漢書とす漢書と漢書と
水漢古今の事柄に準て撰定する
吾も亦く誰は後をせんか自然に人
の如く今に在る事少くは探に事
水漢英確の故訓ありしに同く之
一出一部一も事なるも又文武の道に暗
戸位を登ると言ふ事なくも一〇上り
と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
と教ふる事なくも一〇上りに文武の二
御事と知れり事なくも一〇上りに文武の二

文武海内のためと云ふ事なくも一〇上りに文武の二
時を能く自軍國と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
一〇上りに文武の二と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
に中ありて又と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
海をめぐると云ふ事なくも一〇上りに文武の二
一〇上りに文武の二と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
君父と家名と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
一〇上りに文武の二と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
我意好きと云ふ事なくも一〇上りに文武の二
一〇上りに文武の二と云ふ事なくも一〇上りに文武の二
國政好むと云ふ事なくも一〇上りに文武の二

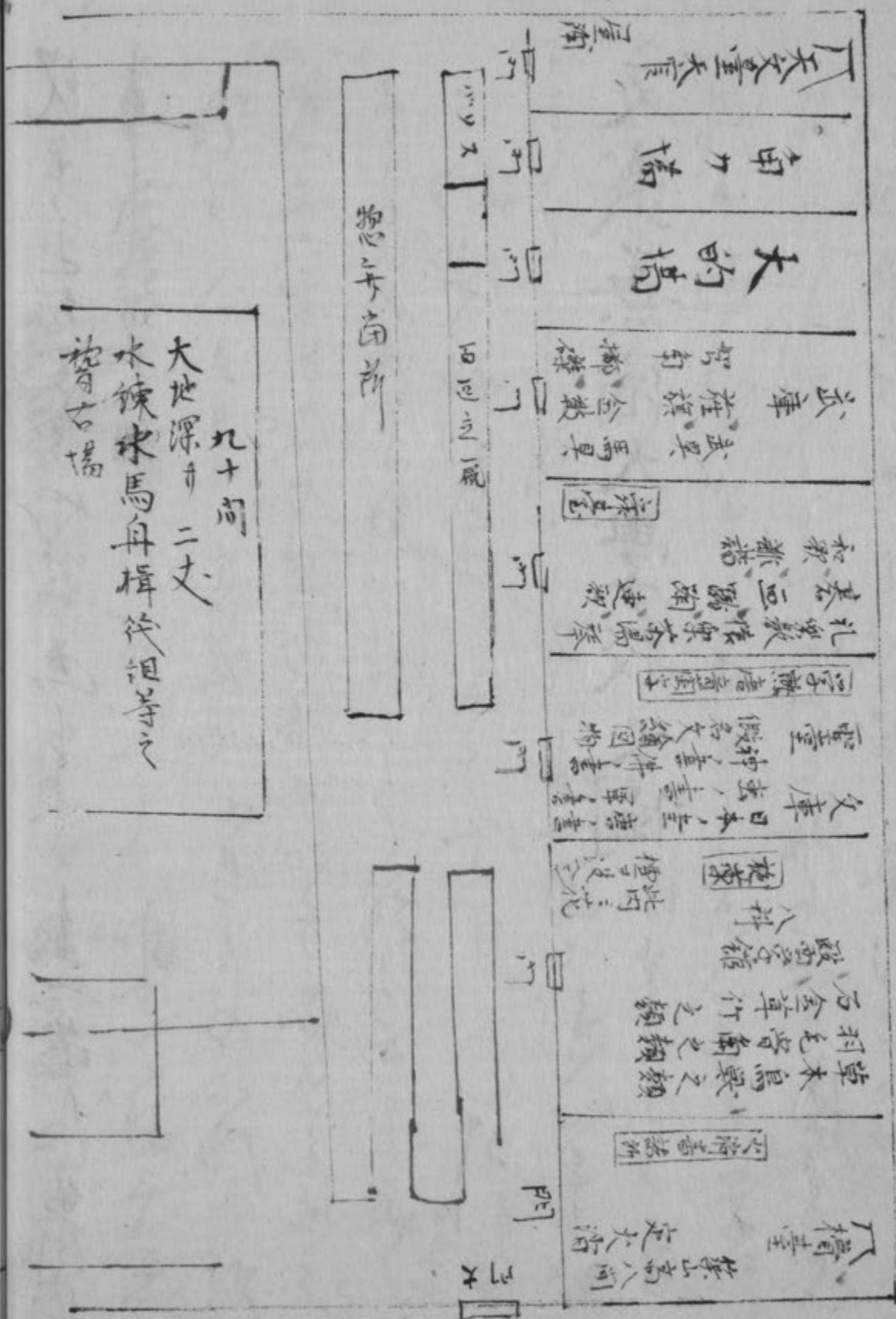
云々... 唯天... 雜事... 〇右に云

兼... 〇右に云... 〇右に云

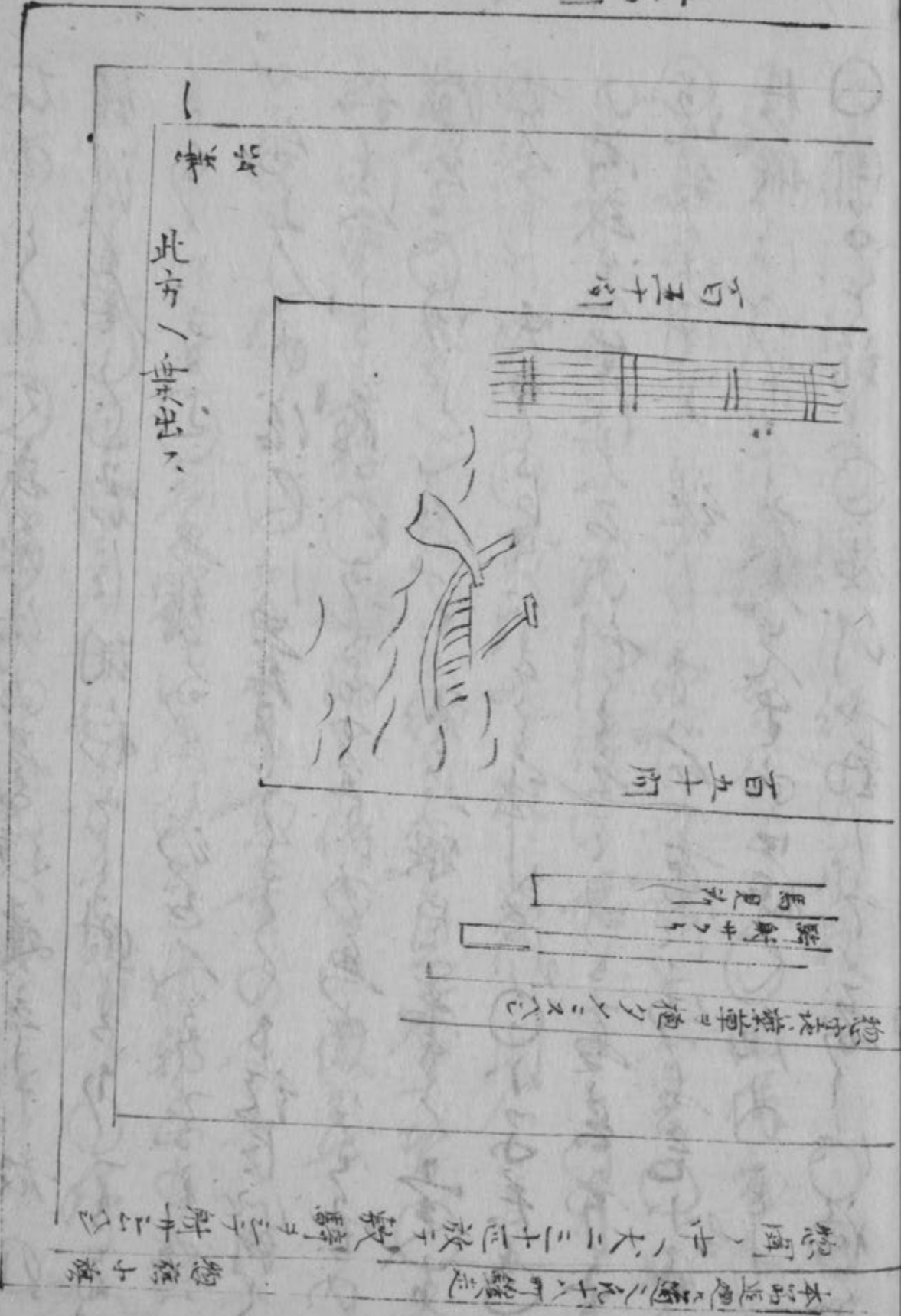
は教申さくは海智の業法海養に
十の如くすとも一向に和歌の如き國をえ
れを傳へたる事甚多し若くは其の學校
と建てるべしと云ふに國をささぐ書
清くし一紙も是れ一運の流の事か
らわぬ福のふかに國を十一〇に國
をささぐ文武の授け給ふに
先五六千石の國の如くささぐ書
はと之も是に其の如き事ありて
是廣狭はふの如くし一紙も是れ
ふ其一二百石の國と云ふに建てるべし

況しとある事なれども
ま——あはれ

文武無備大學子校之圖



九十四間
 大地深井二丈
 水練球馬舟楫等
 皆古場



此方ノ書出ス

本品進想(題)之凡十八町鑲走
 想圖ノ中ノ大二三寸放于散騎ヲニテ射升ニシ
 想標小旗

右のしゝ文武並使のそは後建三放化
終は存く君臣相和を時よりする者
しゝくをよに思ふありゆゑ人々もその
一向上人の信人に思ふしゝくも終はに新し
くしゝくしゝくありゆゑの思ふしゝく其の
時常にゆゑしゝく人々もその思ふしゝく
ありゆゑありゆゑの思ふしゝく○小の美しき
の時或は生に大名の州と云ふしゝく其の思ふ
説ありしゆゑ終しゝく其の思ふしゝく小の
杜撰にゆゑしゝく其の思ふしゝく其の思ふ
○衝子と語る○此の思ふしゝく其の思ふしゝく

非佛に例る○國に終の事教あり○家を
及至るしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
○真云ふるしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
しゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
國政とゆゑ○百姓町人の思ふしゝく其の思ふしゝく
付る○今と云ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
武の藝とゆゑ○小の思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
とゆゑ○文武の思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
しゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
新しき思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく
の思ふしゝく○家の中を思ふしゝく其の思ふしゝく其の思ふしゝく

て人氏親政の心懐弱に可なり憊弱に可なり
し其身と若かりて使約と可なり半一終身と
若かりて使約と可なり由家の心経済と
其重なり半一の心懐弱に可なり甲斐可なり
少く軍の心懐弱に可なり半一の心懐弱に可なり
乃世の中少くも心経済と可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり
理一通りの半一の心懐弱に可なり非ず其
に若かりて若かりて使約と可なり金穀と可なり
乃世の中少くも心懐弱に可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり

初めに周の世樂と止壁喜及與向乃婦人と可なり
省略し終言の馬也と可なり其者ハ
心懐弱に可なり右の心懐弱に可なり其者ハ
乃世の中少くも心懐弱に可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり
乃世の中少くも心懐弱に可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり
乃世の中少くも心懐弱に可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり
乃世の中少くも心懐弱に可なり其難の
為に金穀と可なり思に古き心懐弱に可なり

通解之期云々凡人のよめ大元史と
云々のく可痛の袖夜かぐ天日清世と
行らと点の或由と一〇高世よちと
詩文因雅のこそとせの中と若くわつるそ
まのまめなる者よと一〇高世よちと
に穀を納めんと食と貴人かぐもん根歩
鐵燐とくも穀は在青うよと金銀之
多りぬ賞水と事一故に金銀と
中一と一と穀とん一とさつるあつ長ゆぬ掛
あり若二三ヶ國の鐵燐ありか力り母の
國に鐵燐の國とすす穀と方とありぬ

若二三十年と一等に鐵燐とらとすす穀
と一と一と穀とん一とさつるあつ長ゆぬ掛
飲もも今一物かと一とさつるあつ長ゆぬ掛
農長も使と田中も非ぬとのあれは鐵燐
ありとすもも穀とん一とさつるあつ長ゆぬ掛
金銀の金と物とす二書同と事一とさつるあつ
す穀と中一と一〇高世よちと一〇高世よちと
平日食糧にてぬとの行半と動一
先國邦と領と一人中一のきん指ゆ
下庶人にありと事一と一〇高世よちと一〇高世よちと
先大のしと一〇高世よちと一〇高世よちと

法令の得ずしむるは子之に權を以て
和漢古今のを統括して是れ一概に流傳
ありし唯國古の法書を以て其の書と考へ
臨川の書と考へて射一に概して考へ
その二十年に一交化して其の書と考へ
其の行へて○人將する人此天武將法
の書味と洋の書味とを以て其の書と考へ
一紙の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ

國半軍法ありしは是なりし初漢名將の
はしとて人可先凡の書を求由たてし
あり○尚也或則は其の格にあれり文に
つらつらとて編を編するのありしなり
流傳されとも奉射の礼或は其の書と考へ
或は軍用の射法に考へて其の書と考へ
す或は射法の是れ軍用法考へて後凡れ
射と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ
其の書と考へて其の書と考へて其の書と考へ

に徳顔の君子免外難懦弱君之危也難
 云づく如る業わしとて人々を討つてその
 次は止と親の... 物めれに立難く存し置
 後との業連の... 多難わしと難付い人悲
 背しを長久と保せ... 項羽又織田
 氏の内... 勢つくと終身... 言はれ... 治
 と厚く威威とつくと畏服せし事... 將
 の終しるを... 徳相濟... 是之○物中
 亦有半徳相濟と云にゆるる者... 亦未と云に
 一人と扱ふ事... 中として... 其具の事
 扱ふ未と云の事... 治と今... 未と云に大

四男にま... 童子の天付... 如地... 命...
 軍法のか... 天付城郭... 未... 命... 命...
 ことと軍法の中... 妙訣... 知... ○多...
 かに積む... 弱に積自然の理... 故に一國
 一部... 成... 者... 人... と多く... 人... と多く...
 事... 知... 告... 行... 故に孔子...
 子貢に對... 是食... 兵... 宣... 用有に
 庶富放と治... 思... 人...
 多... 事... 治... 武... 公... 志...
 し... 武... 武... 武... 武... 武...
 あり... 貧... 貧... 貧... 貧... 貧...

漢代の家の子弟武具馬具未らぬは
所持せしむる武士古志ありけり
少壯なる武士と稱せしむる漢儀
平生馬に乗る池近き所自然と馬馴
せし又遊ぶのくまに遊ばざるは
無路なきが骨形骨状の如く是乃
武士と云ふ漢代の家の子多し所持せし
少く軍役も多しと云ふ○古の兵と農
と別れぬに兵の教今世に廢れ二十倍せり
中古の兵士と農と別れざる農に
兵たるもの加無る教大に減らざるは

武士皆なき如く今世に廢れ十倍せり
天正の年七志せしめて城下に諸兵あり
中古の兵士の十分の一なり
傷者に二百の里に曲
多し考 頼の武士と云ふ
考合と農兵 漢代の家中
多く扶持せしむる又比類所と云ふ
漢代百姓と兵には是る別あり又
少壯の組合を立て、軍兵と別る事
乃兵に似たり
多しは漢の如くは二百年の兵は
自れは急遽に卒なり也
十年と期として改革と云ふ

大塚を築く。益の多しに似て、亦蜀の武
石馬を丈万石十六濟と云々。くく多し
謂ふ。武士七萬。討つ六百石の源。と
も馬二丈。差壹七八人。指人の至二十人。出
万石。少しハ騎馬の又六十軍卒の七八百千。と
物。このく。是より。半ハ古。兵の子。と云々
尚。世。武。士。ハ。難。ん。ん。半。に。う。ひ。う。う。古。兵
と。し。て。く。人。名。の。あ。い。う。て。少。子。の。言。の。ま。に
非。ず。ん。ん。と。知。る。く。

○大將馬。ハ。和。漢。の。軍。法。法。法。の。事。を。多。く
漢。の。自。他。と。名。の。思。の。功。拙。の。後。合。點。以

このく。換。登。辨。の。て。は。考。れ。て。一。流。二。流。の
軍。卒。の。傳。授。く。く。益。多。く。く。く。下。息
○大將。く。く。人。ハ。文。武。あ。合。成。半。と。歎。了
和。漢。大。將。多。く。れ。た。文。武。あ。道。は。ゆ。れ。あ。人。あ。き
く。異。國。に。ハ。武。と。呂。尚。蘇。何。管。仲。漢。の。二。組
蜀。の。孔。明。木。ハ。白。お。く。ハ。神。武。帝。神。祖。凡。二
君。の。く。く。漢。世。に。少。の。く。莫。斯。欲。未。亞。の。女
王。求。く。日本。寛。文。の。い。く。世。界。に。一。帝。に。く。ん。と
く。く。漢。と。市。武。と。漢。く。今。数。代。と。終。て
昔。今。之。絶。の。く。文。武。兩。全。の。棟。梁。と。云。く
於。く。大。將。く。く。人。ハ。少。好。也。の。大。將。半。と。く。く

ら包く一は是れ例に似たり又一等とありは
義経の義兵に長し一甲哉二子の士卒と鎌
大関の極敵清正の富義のも一皆一箇の
例新のくそ好新と飛くこい若は事一と
彼とく一は又大将の志氣と云一〇
大将一は人敵あり付ハ衆と衆抜せしむ
ふ徳あり又敵ハ法と教にすると大に講す
に似くふ明あり付ハ衆人の所為く又想を
せしむの徳く切との賞すると明本無二
ふこのハ大将の才一徳あり〇古の名将は
一騎当千の士と態にらはしむる自ら一の徳

めく一は徳あり付り漢の高祖の樊會周勃
蜀の主徳の関羽張飛趙雲魏延の四天王義経
ハ八勇士義仲の十六騎西成の二十八人衆の如
き皆聖の為なり將たる者ハのち一軍前に
かゝり身置ありと云事一は事一

〇馬奈石洞主は十の志自に詳也〇都ら軍
ハ大智の人と一法一は事一〇都ら軍
半ハ法と云く徳に似たりハ徳あり
此後ハ皆兵と用し一ハ法と教にす〇義
の四代ハ代ハ法と用し一ハ強きハ兵一ハ斬
り馬攘首ハ在實と斬り曹操ハ自身警を

切しき皆名所の流し書子も決可法とゆふ
かせにもい思ふと云し一日中名と稱する人
多し其の尤皆天授の才のこゝろて学文を
こころ初め皆通達の名所に處く唯其を
考しし法と云ふ事と云ふ也之を軍之
齊河一介と云ふ書く整への威威を夫の威と云ふ
のこゝろすす意故とあるはれも多き法と云
ふ故と知し○軍の事意しし神速也と
書りし韓信も聖に水と波と魏豹とと云ふ
義經心しと云ふ我と臨して法度と破る流し
しは多し故に義貞一夜の中に許俊と考ふ

しし流倉と端波せし親告様と云ふ子先
是れと云ふ家の妙様とす
○大將しし我は我若兵守攻の具し
あつたし河の子と云ふ官といふやの臨機
無事しと云ふしと云ふしと云ふしと云ふ
しし流倉と端波と又常男と
出ししと云ふ家の軍様と云ふしと云ふ
と討緘田氏の長柄の割りしと云ふと云ふ
島津の實と云ふと云ふの云に我士に様と云ふと
採るにと云ふと云ふに和と云ふと云ふと
人勝付れ指謀と云ふと云ふと云ふと云ふ

唐書の事

○唐書の事と申すに、唐書は貞觀十一年
唐書は貞觀十一年に於て、唐書は貞觀十一年
と述べて、此と孰の河清と申す、貞觀十一年
是れ、先ず事、皆大將の支那に古事なり
故に、唐に云、先民忘、吾等、先民、忘
吾死と云つ、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
知す、唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘

唐書の事と申すに、唐書は貞觀十一年
唐書は貞觀十一年に於て、唐書は貞觀十一年
と述べて、此と孰の河清と申す、貞觀十一年
是れ、先ず事、皆大將の支那に古事なり
故に、唐に云、先民忘、吾等、先民、忘
吾死と云つ、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
知す、唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘
唐書、多し、之を、先民、忘、吾等、先民、忘

たつと一々海のたどる草鞋馬車と稱する
る。或は、おまに於て以て一國を及ぶ
向て一徳ある。徳子の理屈を以てその
まがう一理屈とて、或は、一徳ある。徳
一々海のたどる草鞋馬車と稱する
○高世福瑞流意お、皆高貴のもの、其
半は、或は、一徳ある。徳子の理屈を以て
そのまがう一理屈とて、或は、一徳ある。
高世福瑞流意お、皆高貴のもの、其
あつと一々海のたどる草鞋馬車と稱する
そのまがう一理屈とて、或は、一徳ある。

竹の根の自らくぬの根のたどる草鞋馬車と稱する
練衣を穿てり。或は、一徳ある。徳子の理屈を以て
久武の政のたどる草鞋馬車と稱する
都心一々に、或は、一徳ある。徳子の理屈を以て
或は、一徳ある。徳子の理屈を以てそのまがう一理
いっや、一徳ある。徳子の理屈を以てそのまがう一理
入つと一々海のたどる草鞋馬車と稱する
練衣を穿てり。或は、一徳ある。徳子の理屈を以て
謀とよむ。或は、一徳ある。徳子の理屈を以てそのまがう一理
に於て、一徳ある。徳子の理屈を以てそのまがう一理

或ハ諸小藩ハ或ハ偏トセテ一ニ地トシテ
 道々トも罷セムル者古ノ陳汝何ハ何事
 神トモ遠ク之ハ何トモ事ありテ新ハ何ハ何事
 のハ君たゞハハ新利害ト云ハ其ハ何ハ何事
 吾ハ何ハ何事明ニ務思ト噴ニ証書ト云ハ
 妻トシテ吾君ト来ト國ハ汝ハ何ハ何事
 陳汝ト云ハ其ハ何ハ何事ハ何ハ何事
 了石トシテハ人名ハ其ハ何ハ何事
 一身ノ為ノ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 憐慈又或ハ其ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 う者○上ハ其ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事

百性獲ルハ地遊ト云ハ其ハ何ハ何事
 吾ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 衣何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 思ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 此ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 ○古者兵ト論ル者其ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 過其中心ト云ハ其ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事
 其ハ何ハ何事ハ何ハ何事ト云ハ其ハ何ハ何事

以明一放以古者の聖人景帝帝舜禹湯文
武周公皆軍の名人にも如流の善帝に推
徴あり舜禹に二苗あり苗の征あり湯武
に桀討放致有周公に司馬法あり春秋の
六卿魯の三家齊の管仲の軍法の日の
久しきとて國を治り礼の成り戎車に駕し
征伐を以て成文武一は女の人を以て知
兵家と云へば後世又文武を別るものに
なる也とて用と外を事一編として予自由
に采へるも春秋の比にも女の人を以て
兵知しと宋襄の如く女人の漢にも陳

餘り如き不香上の人もも聖人の道と借
考と撰るも聖人の教の兵の用によきも
男上人の兵女謀と云くは新と云ふも
兵の兵家といふ一書の中にもいふも
公二書は文武の亦後世抄境と合点
漢の二祖光武蜀の孔明唐の太宗我
神祖の外は一は兵家守一の秘訣あり
龍虎を命の命の石年の世も廟廟に居て
王伯の業と興一十戈の字に立る兵士
と撰る漢熾を友と一は新成の兵にえ

負家すれに富すれに或は富家の利権
とすれに利と抑と利権と集むるは此の
利と又は工高の利と又は工高の利と
は立く國と富すれに立く事かと皆世の中
の人を信長あきやうに世を争うて併の
利をくは二つと信長と云くは信長の大
領家の二つありて封建と郡縣とありて唐と
夏殷周の三代は封建にして秦以来郡縣と
ありて今もせまきも夏殷周の古代も
郡縣にして今もせまき封建と郡縣と
大名と建をても國の世事は主は國の
は後と世作する事あり郡縣と大名と
建をて國とくは後と國の守と遣
て其國郡の政事は主と目し事と封建
の大名の子孫相續て後代も國と保川
國の守は三年又年に交替するて封建の
公儀と古地とあり治く大名とたに天下と
治郡縣と古地と分得國と治く役人の
て天下中の世作と公儀唯一つ所
見れん大名の二つありて其の
と論事然明の體類の集れたること
と所とありて封建の大名は後世あり

負家すれに富すれに或は富家の利権
とすれに利と抑と利権と集むるは此の
利と又は工高の利と又は工高の利と
は立く國と富すれに立く事かと皆世の中
の人を信長あきやうに世を争うて併の
利をくは二つと信長と云くは信長の大
領家の二つありて封建と郡縣とありて唐と
夏殷周の三代は封建にして秦以来郡縣と
ありて今もせまきも夏殷周の古代も
郡縣にして今もせまき封建と郡縣と
大名と建をても國の世事は主は國の
は後と世作する事あり郡縣と大名と
建をて國とくは後と國の守と遣
て其國郡の政事は主と目し事と封建
の大名の子孫相續て後代も國と保川
國の守は三年又年に交替するて封建の
公儀と古地とあり治く大名とたに天下と
治郡縣と古地と分得國と治く役人の
て天下中の世作と公儀唯一つ所
見れん大名の二つありて其の
と論事然明の體類の集れたること
と所とありて封建の大名は後世あり

去義兵と奉く清軍と討焉蓋して
唐山の事と云ふを為し時に當て是後
討きと交りすに似たり又一編す
身に如くすれは清後の事はしす
け二の優劣に付に如くの如くは
冷ぬりやう経済の如の出来は
唐山の唐代の割取と清まで
の古に郡縣の政と久きを月と
如くは天トの縣と云ふは清國に
守護と云ふは國の事と云ふは
氏権として國と云ふは為る
何時と云く

我國の機出末と云く守護に云
と云くは人名と云くは及の並
に云くは誰計と云くは長局
新國と云くは海に廣大に如
源相續と云くは地と云くは
如くは郡縣と云くは二百年
と云くは

神祖天トと云くは海の事
五百と云くは人名と云くは
如くは考と云くは封建の事
如くは十四と云くは新の事
軍の

大平山一子之方御皆世にゆき事あり
より考へてあり一由世にゆき軍政の定
計に家づくにありと云一尤多くは大本と云
人の制印ありて法祖畧にして精洋成
るの由ありれば利に足るるにありて了別
之更に別印して定む一〇大将と云一
必ありてせに思ふ事あり日中にゆく名君名將
と稱せし源義家源兼光の杉細々源義経平
時政曰恭時室町守氏々新田義貞楠正成
甲斐信玄越後謙信平織田氏豊臣大岡
加茂清正赤松良隆皆援群の功業有

人にもありて熱心文武両全と難重し
申へば杉細々大谷あり一及源兼光に足と
入つて一源義家と出して在る
海山の大小名と事後と一杉細々と一
妻一及成徳と云一天下の至る鴻業と
之一一悟義と一早く一山崎守成に
大畧ありて力ありて徳尚世の情にま
天下の武運に靡く一さ事と和く一
柳陽齋殿楹と不夫一に非儀不即法多
と一と一と一徳あり属せし事あり戦闘道
下もありて徳大名と云一平清盛と云一

似しう故に一友号を奉りて天不感のよろ
直して人常く連にるれ侍宗奉時小
軍團の淵とんして小徳之勤小悪し行父祖
の相傳に非命をんれ のまじり事とひん
唯時宗之の使去る首を削し一代の
自痛く古今事有の英氣と云し義経の
小持合にゆきして徳教と被とく時中
大凡に酒色と淫る橋本に鶴城と破り
徒始しやん之の及下に非す是也唯戦
闘の事也よしてせよの答をいふ人可
流官し後考れに就て一生を終し

いふ事と知るし一友号の事
然も時中がは時中く唯運に宗し
吾と記し一奉にこし討つやまに吾奴
の切とあせり然も時中後よりとりし
ゆく君寵及び官禄亦ひら一切の是利も
あ如く故に吾年の心と懐く全義に及と
しよもけとあつても孤立の好と物を義貞
うう是皆少也して後世に傳る人の心
すあふにあり唯恨くをいしつとあせ
互角の西雄をいし一れ且にカと陳す事
少終しやん吾一國に業を終し

之軍洲の了費は織田氏の援軍の英傑
よりして争ひ而敵をくつらばる可成と認
むる天を以て守るべき物として天を以て
問答を輕率にのりつらばる可成と認
むる事業もして明智の病に裁せしむる
事して徳ありきなりと正法のを母とする
志の如何なれど生質信義に傳せしむる
所を天下に解の極と知むる新田是利
の更將と記述してこれ併合の如く絶
之能く知る人絶と認むる身次は討
死を遂げしに寔るのみ討死といふ可成

是と云ふは討死と云ふに似たり唯子孫之
又代十年の間中固之南朝と補作する
一実正法の遺傳して楠家の大勲功
業として信じて實徳相爲する由後主討
人絶後續して人絶と稱すは有る感あり
謀智有致ハ少振す、戦ハ必勝天、禀の質
朴に居せし時代、治の如く猶に治、奉
世徳、治く、圭角の名、これと此世に権、真
の英雄と云ふこと、大周微、疑、思、海、門
と字、如く、天下と使、令、す、れ、も、世、に、是、と
言、わ、す、る、人、の、由、と、治、く、朝、鮮、と、編、唐

山と雲分す。後威、和漢一人と押心する。攻伐の勉強の爲め、且ふ天子、我懐少して、後、高良、心と考ふ。信、名、婦人の其、言、以、此、題、之、中、天、下、忽、神、祖、に、由、り、神、祖、或、徳、と、稱、し、天、下、一、途、の、所、の、業、神、は、一、人、に、由、り、と、武、百、年、來、海、心、故、して、千、石、之、紀、迄、邦、來、資、す、實、に、開、闢、以、來、の、一、人、あり、社、法、と、權、及、す、一、方、一、世、天、地、と、是、に、長、久、第、一、○、昇、平、之、時、に、必、率、衆、と、す、す、率、衆、盡、時、に、法、儀、を、又、士、資、窮、す、る、資、窮、す、時、に、我、儀、も、名、の、こ、ゆ、り、

實、用、の、中、に、由、り、官、制、に、男、子、當、世、若、く、は、率、衆、盡、和、と、云、ふ、一、人、あり、社、法、に、其、味、深、く、物、治、り、ゆ、り、世、に、傳、り、ゆ、り、友、に、一、筆、抄、下、僅、に、經、済、の、大、畧、と、云、ふ、の、如、に、又、之、と、か、し、作、國、品、と、經、済、す、る、の、要、を、つ、り、り、食、貨、以、て、其、の、授、或、使、法、令、官、職、地、理、章、法、を、了、す、人、を、食、を、死、し、貨、を、死、れ、つ、物、と、與、す、一、の、如、し、以、れ、に、食、貨、と、經、済、の、中、に、一、す、一、の、如、し、略、に、食、を、一、て、以、て、式、を、以、て、人、滿、ふ、明、と、開、闢、の、高、倉、の、人、の、と、り、り、故、に、れ、式、と、云、ふ、一、人、論、と、明、を、す、ぬ、人、の、道、を、る、て

少子、智發し事、所、册加に及の問く
勸く智と問りし、册之の一人と取、その
法の行象の法、何、我法の軍謀の利、云
と云、言、し、て、本、平、の、世、に、以、世、に、人、の、人、の、事、と
く、人、馬、に、教、法、を、り、故、又、我、益、と、も、ふ、事、は
制、印、以、後、を、も、事、と、制、交、の、事、物、に、定、式
あり、天子の事、物、天子の事、物、法、候、の、事、物
は、法、候、の、事、物、也、士、庶、人、の、事、物、は、多、又
士、庶、人、の、事、物、也、修、り、定、式、有、と、云、是、も、早
と、多、り、上、下、と、明、り、な、る、道、と、し、て、且、命、を、治
め、制、は、法、候、に、按、と、し、て、多、く、と、按、に、お、後、者
とは、云、一、編、編、中、教、令、の、條、ゆ、り、事、に、為
る、事、一、一、人、を、懲、り、さ、る、人、と、可、し、す
州、之、官、職、の、下、中、の、事、と、一、人、と、冊、信、也、の
あり、もの、に、何、し、て、收、法、の、役、目、と、立、と、人、の
益、量、と、採、と、ま、り、の、條、と、按、と、一、文、宛、世、信
法、と、多、り、事、に、地、所、に、因、り、寒、暖、地、所、等、
所、は、以、何、海、に、上、早、遲、の、方、別、と、細、に、考、へ
寒、暖、厚、薄、等、に、上、早、遲、の、利、と、云、又、又、去、り
宜、し、く、按、と、す、事、に、又、く、の、心、事、と、お、り、と
此、利、と、書、事、に、事、法、に、上、早、の、符、號、先、云、按
よ、事、の、美、し、く、人、小、お、り、と、云、事、と、云、事、も、條

と、は、云、一、編、編、中、教、令、の、條、ゆ、り、事、に、為
る、事、一、一、人、を、懲、り、さ、る、人、と、可、し、す
州、之、官、職、の、下、中、の、事、と、一、人、と、冊、信、也、の
あり、もの、に、何、し、て、收、法、の、役、目、と、立、と、人、の
益、量、と、採、と、ま、り、の、條、と、按、と、一、文、宛、世、信
法、と、多、り、事、に、地、所、に、因、り、寒、暖、地、所、等、
所、は、以、何、海、に、上、早、遲、の、方、別、と、細、に、考、へ
寒、暖、厚、薄、等、に、上、早、遲、の、利、と、云、又、又、去、り
宜、し、く、按、と、す、事、に、又、く、の、心、事、と、お、り、と
此、利、と、書、事、に、事、法、に、上、早、の、符、號、先、云、按
よ、事、の、美、し、く、人、小、お、り、と、云、事、と、云、事、も、條

三下の人品と知漢乱これの多し其時既に
 一法之廿九つは経済の大成なり又者一
 條ありは説き及んば世に傳へず事固に
 成るべし其の經濟の成り由は經濟
 の補佐なりと云ふ事なり一は元も
 一軍法の主眼は是は使と云ふ事なり
 唯書と論と和漢書其古く豊後のは巻
 の失と云々自叙あり故し一論は經濟
 の中と述べて新換卷なりと云ふは其の
 中と云々霍去病の顧方君也何年
 子至學兵法と云々、實に通きりとも

身一は統唐山、其人性甚柔純少多
 に乞ふ人ぬるはと云ふも其精察し
 半ハ拙き事なりと云ふ故し唐虞以来
 子の事なり少なり諸君の若しれは
 にもくはに韃靼に令せられし頭の髪を
 利を指すとせしめし是軍記の事と書
 戦術も也なり軍記の事と云ふは
 力弱く其の基向いそ小子大人に
 新ありしなり軍記の事と云ふは
 軍記の事には臨事向ふ事又曰く
 其の法軍書
 其大率なりと云ふ事なり

に似たりと云ふを以て文武兼備の事にして終て
効る時、桂小膠一にて一編のみに依りては
と云ふし、たゞも云ふし、和漢及び和蘭此
軍書と云ふ交文或は云ふと云ふと加へ軍情
と云ふし、春械と制印と云ふ上に依りて練
河や一と云ふは、船練のことに依りては又
唐山編と云ふは、戦闘の事と云ふは、兵事
練も、戦闘の事と云ふは、兵事と云ふは、
卒の今、戦強く、今、日の改、
練、
自、
と云ふ、

下

